

落窪物語

永代美知代

日本文學講義

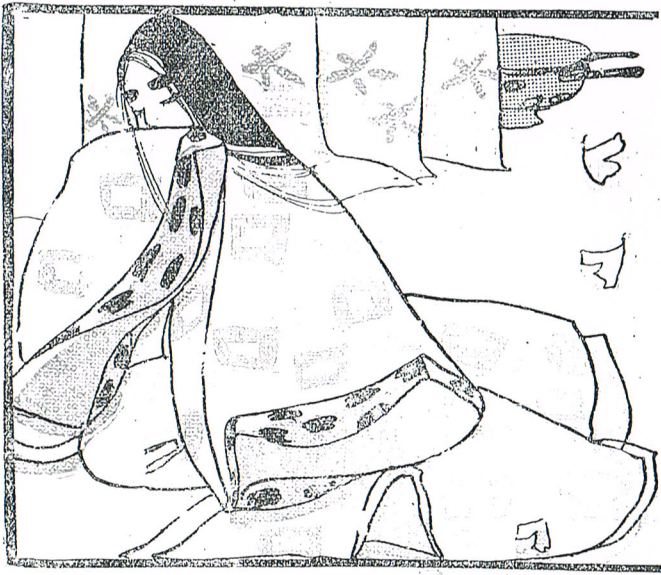
この物語の作者は、源の順朝だと傳へられてゐる。しかし確かな事は解らないが、とにかく、今から九百二十年ばかり前の、冷泉院時代に作られたもので、書中に左近の少將とあるのは、藤原忠平公をモデルにしたものと云ふ、某中納言の北の方が、その繼子に當る姫君を憎んで、寢殿の放出の一間なる一段落込んだ部屋に閉籠めて住はせた上、落窪の君と呼ばせた、その名を取つて落窪物語としたのである。全篇誠にこまやかな筆づかひで、面白く書かれてゐるが、今その筋だけを、極々ざつとかいつまんで紹介することにした。

今は昔、數人の娘を持つた中納言があつた。大君(長女)中の君(次女)には、已に聲取りをして、寢殿の東西に花々しい屋敷を建て、住はせた。三の君(三女)四の君(四女)をも、それく立派に育てるのだが、中に一人、亡き母君を王家統流の御方と云つた異腹の姫君がある、それを繼母に當る北の方がひどく憎んで、召使の者どもにも劣つて辛く當る。勿論姫君などと呼ばせるものではない。落窪の部屋に住はせたのに因んで、落窪の君と呼ばせることにした。中納言はとかく北の方任せの人で、落窪の君はつくづく人の世の涙を思ひ知るのであつた。だが産れついでにの伶俐さは、六つ七つの頃、故母君から教はつたばかりの琴をよく覚えて居て、なか／＼の妙手であ



つた。それに暇々に習つた裁縫が上手なので、北の方にはそれを好い幸にして、一生お針役を勤めさせるつもりで、二人の聲の装束から、家内中の縫物を残らず押し付け、ちつとの隙もなく急ぎ立てた。姫は夜も寝ないやうにしてするのだけれど、少しでも手遅れると、北の方から憎々しい當言を浴びせられるので、いつそ死んだ方が増したと考へる。實際可哀さうな身の上で、手頼りにするのはたつた一人、故母君在世の頃から召使つた後身(介添の役)の少女が居るだけで、たゞもう亡き母戀しと泣き暮す。するうちに、三の君は藏人の少將と結婚した、落窪の君は愈々愈々縫物が殖えて、悲しい忙しい思ひをせねばならなくなつた。その上にまた、たつた一人の手

頼と頼んだ後見をさへ、三の君の方の仕人に奪られてしまひ、姫をいとほしがつて、後見が落窪へ出入りをする、北の方の御機嫌が悪い、姫はそれをかなしい事に思つて、それからと云ふものは後見を安濃(はかないといふ意)と呼んだ。安濃だつて姫の傍を離れたくないが、仕方がない。三の君の方へ行つて後見も、始終姫のことを思つて、どうがなして救ひ出してあげたいと思つてゐる。するうちに安濃は藏人の少將の臣帯刀の妻となつたので、泣きながら姫の身の上を話した。この帯刀の母親は左大將の御子、左近の少將の乳母である。丁度まだ少將には定つた妻君もないので、帯刀から落窪の君の噂を聞くと、是非さうした憂世の苦勞を知



つた姫君と交際したいものだと思つて、安濃を取次ぎに、度々物哀れな歌など、詠んで送られる、併し、恥かしいのと、北の方の手前を憚つた姫は、唯の一度も返事をしない。けれども左近の少將の熱心は容易ならぬもので、どうがなして出會つて話したいものだと思つてゐる。と、その頃、中の君の聲右中辨の君が年來の願とあつて、石山詣を思ひ立つた。誰彼となく供を許されたのに、落窪の君だけは、例の北の方の意地悪い邪魔で、人數にも入れない、安濃も實は三の君おつきで行かねばならぬのだが、姫がたつた一人取残してある淋しさを思ひやつて、俄に作病して無理に止まる。姫を慰めて話をしていると帯刀から手紙で、お供をよし

たと聞いたが本當か、さうなら逢ひに出掛けると云つて来る。で、姫様も淋しくて被在るから、慰めて上げたいと思ふなら被入いと返事をやる。帯刀がそれを左近の少將に見せると、それは好い機會だと云ふので、その夜こそり落窪を訪ねる。運悪くひどい暴雨で、二人とも濡鼠になつた。

姫は少將の親切が嬉しくないではないが、何分にも北の方の手前が恐ろしい。それに几帳一つない汚い部屋、みすぼらしい身装を恥かしい事に思つて、消えも入りさうな容子に俯向いてばかりゐる。少將は又それがいちらしくつて、白絹の姿へた粗末な身装に引きかへて、頭つきなら髪具合なら、何とも云へぬ美しさを、一層好もしく見るのであつた。安濃は姫の氣持を察して、二度目に少將が訪ねて来るまでに、伯母の許へ手紙を出した、几帳だの手洗盟だのを借り調べて、さんぐ氣を揉む。

三晩目の翌朝、少將が逆への車を取りにやり、もう歸らうと云つてゐる處へ、石山詣の連中がどやく

が、姫と對坐に坐つて縫物を手傳つて居る様子なので驚いてしまつた、人柄と云ひ、やさしい志と云ひ、自分の娘の聲の右中辨や藏人の少將にも増した立派なので、見れば見るほど妬ましく、尙も立つたまゝ見入つてゐる。すると中では少將が、

「塵も馴れない仕事をして困つた。あなたもお暇さうだ。可いからもう一度北の方を腹立たせなさいよ」などと云ひ、姫が聞かないで縫つてゐると、いきなり灯を吹き消したりする。北の方は妬ましさの餘り、姫の帯刀と何か悪い關係でもあるらしく中納言へ云ひ告げた。おまけに自分の伯父に當る典藥の助の、六十ばかりになる貧乏爺さんの處へ、落窪の君を嫁にやらうと謀んだ。

北の方の告口を聞いた中納言はひどく怒つて、一門の面汚した。そのやうな者はもう落窪にも置けない。北の部屋へ閉籠めて、食事もやるなといふ騒ぎである。勿論、北の方は落窪を何處かに閉籠めて、二度と再びあの人柄な男子の方と逢はせたくないの

歸つて来た、ハツとする間もなく、北の方が安濃を呼び立てる、急いで出迎へて、やつとその場に濟ましたが、帯刀が取次ぐやうに、預かつた少將から落窪への手紙を、藏人の少將の髪を結ぶる時に落して来たその爲に、三の君がそれを北の方に見せたから堪らない、左近の少將だとは解らないが、とにかく落窪の君がある男子と交際してゐる事を知られてしまつた。その晩北の方が、わざとに急ぎの縫物を持つて、それとなく落窪の様子を見に行くと、見馴れぬ几張があつたりするので、大變な小言を云つて口汚く罵る。姫は丁度來合せて居る少將に對して、恥かしく悲しくて堪らない、泣きながら縫物の裝束を折つて居ると、北の方が立ち去つた後で、几帳の陰から出て来た少將が、何かと云ひ慰めながら、自分も一緒に手傳つて折つてやる。

が一心だから、思ふ壺と喜んだ。帯刀は直ぐお暇になつて、左近の少將の方へ歸つてしまつた。

安濃はどうかして姫を救ひたい、せめて逢ひたいと思ふのだけれど、北の方が自分で鍵を持つてゐて、一日一度だけ差入れる食事時の外、決して戸を開けさせない。左近の少將も是非救ひ出さなければ置かぬと云つて、帯刀と安濃に相談する、どういふ風にしたものかと屈託してゐると、北の方から許された典藥の助は、もう姫を自分のものやうな氣で、姫の身近う寄りつかうとする、最初の一夜は姫の病氣をかこつげに旨く免れ、次の一夜は安濃と姫と内外から堅くしんばり棒をかつて、折角北の方から渡された鍵を持つて来た典藥の助も、夜中戸の外に立ち明さねばならなかつた。

だが、北の方は姫の事は典藥の助に任せ積りで餘り戸締を嚴重になくなつた。安濃はそれを幸に、この隙に姫を逃さうと決心した。と天の祐か、明日の祭見には北の方を始め家中皆出掛ける山を聞き込

んだ、早速左近の少將と帯刀に示し合し、姫にもその事を通じて、専ら準備にかゝつた。それとも知らぬ北の方が、姫達と一緒に祭見物に出掛けると、車の出るのを待つて居た左近の少將は、花らしく仕立てた車に乗つて、いきなり中納言家の留守宅へ入つて来た。だが何といふ心憎い仕草であらう。北の方は、典薬の助から鍵を取返し、ちやんと錠をかけて行つて居るではないか。こちらは齒を嚙んで口惜しがつたが仕方がない。戸を押し破つて、姫を救出すや否、迎の車に乗せ、安濃と帯刀も一緒について二條の邸へ引き上げた。二條の邸は左近の少將の別邸で、少將は姫を氣樂に住はせるため、朝から掃除萬端の準備を命じて置いたのである。

(次號完結)